

第四項 三福と三心を巡る問題

証空は三福正因と九品正行という問題を大きく取り上げている。これが証空の思想の特徴であり、またその理由を説明することが、浄土経における証空の位置を明確にすることにもなると考えられる。またこの三福の問題については三心と同様に、証空の主著のほとんどに登場するほど大きな問題となっている。

この三福と九品正行については『観門義』巻第一にまとめられている(『西全』三、三一―頁)。そこに見られる解釈は、三福とは行門、九品とは観門であり、その体は異なるものであるとする。善導の意は散の体として九品を選び取ることにより、この意で三福正因、九品正行というのは三福を九品の中に入れ観門に含めるということである。

素^{ヨリ}仏意^{ハト}為^シ九品^ノ観門^ノ可^シ意^ラ得^ル。故^ニ以^テ九品^ノ之^ヲ行^フ皆^ク悉^ス合^ス三福^ニ也。

と言い、その理由は善の体が正因正行のではなく三福九品の道理が観門にあるため、

指^シ能^ク詮^ス教^ノ本^ノ意^ヲ判^ス正^ノ因^ノ正^ノ行^ト也。

とし、これを称して釈迦の要門と言ひ、観門が成じれば弘願が顕れ、この弘願こそが正因正行の体であるとする。そこでさらに、

得^{ツレハ}能^ノ詮^ノ教^ノ道^ヲ理^ヲ行者^ノ心^ハ可^シ定^{マル}三^ニ心^也。可^キ合^ス二^ノ一^ノ門^中弁^定三^心以^テ為^ス正^因積^ト也

と言ひ、行者の心が三心に定まることを説く。すなわち三福を行門と見ずに観門であると理解することで弘願を知り、その教えの道理を理解することで心に三心が定まるのだとする。そこで観門の三福としての理解が次に説かれるのである。例えば第三福、行善については次のように解釈する（『西全』三、三二二頁）。発菩提心の凡夫がいて、自らよく行を行ずる、というのを観門の意に解せば、上の行を願行の行と読み、下の行を往生経による正行を指すとする。すなわち上が観門下が弘願を指し、第三福の行善の本意は願行の行であると解釈するのである。

このように三福正因の解釈がなされたが、その三福は修したままで良いのであろうかという疑問が湧く。選擇され捨てられた善であつても往生の正因として為すべきかという疑問も残るのである。最初の疑問については『観門義』卷第三の回向発願心釈（『西全』三、三四三頁上）において、回向発願心が発れば「一切諸善根悉成^ク観門善^ト得^ル往生^ヲ」三福諸善根。并^ヒ十三定善悉回向^ス也」と言ひ、三福を往生の正因としながらも回向する必要性を説くのである。

あるいは観門に入ること自体が三心具した状態と考えて、三心具していれば三福はいつでも往生の正因となると言っているのかもしれない。

これについてはさらに『他筆鈔』卷上にある三心と三福の関係（『西全』五、二九一下～二頁上）を見ることによって明らかになるであろう。すなわち観門の三福であることを前提に諸仏浄業の正因、凡夫往生の正因として三福正因を説くことは「三福正因義依三心文」とし、「弁定三心以為正因」との文から三心正因が説かれるとするのである。さらに、

未^ツ差^リ別^レ此^ノ三^ノ福^ノ之^ノ義^ヲ 顕^ス此^ノ義^ヲ 事^ハ在^ニ三^ノ心^ノ文^ニ。即^チ積^ム三^ノ心^ノ云^フ以^テ過^ク去^リ今^ニ生^ル世^ヲ出^ス
世^ノ之^ノ善^ヲ 眞^ニ実^ニ深^ニ信^ニ心^ニ中^ニ回^シ向^シ発^ス願^ス 願^中 往^ス生^ス上^ニ

とあり、諸善をもって回向発願心によって往生できるとするのである。あるいは『秘決集』にも三心に三福を撰すという表現が見られる（『西全』一、二五六頁上、二七四下）。

これらの解釈は三福正因とは言っても、それは三心によらなければならぬという論理を示すものである。

それでは三心正因の中に三福正因が含まれるのであろうか。次にこの問題を考えてみたい。証空は『他筆鈔』卷上にはっきりと三心正因と三福正因は同じであり、

凡^ハ三^ハ心^ハ者^ハ。還^テ欣^ニ淨^ニ顯^ニ行^ニ。領^{スル}解^{スル}機^ニ行^ニ身^ニ土^ニ心^ニ他^ニ。此^ハ心^ハ離^ニ三^ハ福^ハ行^ニ不^レ起^ニ。三^ハ福^ハ行^ニ離^ニ此^ハ心^ハ不^レ成^ニ。

〔西全〕五、二九五頁下

と言う。一見して念仏の行を忘れたかのごとく見える。しかし、証空は続けてこの心を、「成^テ心^ノ体^ト。同^ニ顯^ニ弘^ニ願^ニ一^ニ行^ニ」と言っているのであり、三福正因とは言ってもそれは弘願の一行に帰すものであることを明示している。

この心と行の関係は、のちにまた触れることになろう。

第五項 領^{りようけい}解^{かい}の心と三心

三福は三心によつて正因となつた。それでは三心はいつ起こるかということが次に問題となる。証空はその著書に領解という名目を出して解釈するのである。領解とは『観経』における韋提希の領解を言うのである。『他筆鈔』卷上に次のように言う。

云^フ正^ハ因^ト韋^ハ提^ハ領^レ解^ス心^也。此^ハ心^ハ就^テ定^ニ善^ニ所^ニ顯^ニ也^也。定^ニ善^ニ立^テ領^レ解^ス。入^リ此^ハ領^レ解^ス心^ニ即^チ散^ラ善^メ名^ヲ觀^ト也^也。觀^ト者^ハ即^チ領^レ解^ス心^也。領^レ解^ス心^者三^ハ心^也。三^ハ心^ハ即^チ正^ハ因^也。

〔西全〕五、二五九頁上